



明日を生きる

善光寺住職
黒田武志

青春の夢

私は一昨年、心身の健康保持のため、かねてから念願の断食だんじきをしました。断食をしたあとには栄養を適度に補給しなければならぬのですが、食へすぎてはいけないと思って、お粥かゆとお味噌汁を主に口にしていました。胡麻ごまなどを

飯にかけて食べると栄養がとれるのですが、それも我慢して玄米と海藻だけにしていたのです。こうしたペースで二カ月も続けたら、ガリガリに痩やせてしまいました。六十七キロもあった体重が現在は五十四キロ。実に十三キロも減ってしまったのです。

身みが軽くなったのはいいのですが、困ったこ

とにズボンはダブダブ、上着はブカブカになってしまいました。そのうちに「黒田さんは癌だ」という噂が立ちはじめたのです。噂とは恐ろしいものです。大変なことになった、と思つて鍼灸を毎日続け、何とか体重はもちなおしました。まあ私の失敗談です。

この年になつてもこんな失敗をしている私ですから、僧侶の修行を始めたころは失敗だらけでした。きょうはその失敗しながらの修行の中から、私が得たものをお話して、若いみなさん方の生き方に少しでもお役に立てたらと思います。

私は栃木県大田原市にある寺で生まれました。兄弟は七人。何しろ男ばかりの兄弟ですから、両親はたいへん苦勞しました。寺は大きいのですが、経済的には決して裕福ではありませんでした。父親の教育方針も「学校には入れてやるが、卒業したらいっさい面倒をみない。自

立する道を探せ」というものでしたので、必然的に自分の将来を真剣に考えざるをえなかったのです。

しかし、みなさんも同じだと思いますが、進学先や就職先の選択は、青春時代の実に大きな問題であり、夢でもあります。私の夢は東京の大学を出て学校の先生になることでしたから、かなり一生懸命に勉強をしたつもりです。

高校三年生の夏休みに、二番目の兄が海外で布教活動にあたる開教師としてアメリカへ渡ることになりました。私は世界のあらゆる国で勉強してみたいという憧れももっていましたので、「兄さんがアメリカへ行くなら、僕も一緒に行きたい」と兄に頼んだのです。すると兄は「お前は坊さんが似合う。親父にもそのことを話してある。そのほうがいいよ」と言うのです。

そしてその意見に従い、僧侶になるために東京の駒沢大学に入りました。そこで四年間勉強

し、卒業してすぐアメリカにいる兄に手紙を出しました。すると、こういう返事が来たのです。

「大学を出たぐらいでは、アメリカ人に仏教を説けるものではない。せめて大学院を出ろ」。そこで大学院に進み修了した時点で、また兄に手紙を送りました。しかし「大学院で二年や三年勉強したところで何にもならない。坊さんは修行が必要だ。修行しろ」という厳しい返事です。

そこで横浜の鶴見にある曹洞宗大本山総持寺へ修行に行きました。修行といっても、世間的にみるとまったく下積みの仕事です。当番に当たれば起床は午前二時。みんなが寝ているあいだに雑巾がけをし、みんなが起きて坐禪する前に火をおこします。そのうえ古参の雲水の部屋を掃除し、火鉢に火を入れておかなければなりません。

早くアメリカへ行きたいという気持ちでいっぱいなのは、僧侶の心構えをつくる大事な初歩

昭和37～40年 総持寺において



の修行も、まったくやりきれない気持ちで、いやいやながら勤めていたのです。しかし、この修行を終えないと資格がもらえません。何とかがんばって半年で資格を得ましたので、また兄に「半年修行して一応かたちは整いました」と手紙を出しました。しかし「お前、半年や一年の修行で何ができるものか」と大目玉を食らったのです。そう言われてみればまさにその通りで、いやいやながら半年我慢して資格をもらったところで、何一つ身につけていないのです。さらに手紙には「永平寺えいへいじに行け」と書いてあるものですから、これまたいやいやながら行くことにしました。こんな気持ちで修行しても何にもならないのですが、そのころの私にはまだそれがわかっていなかったのです。

逃亡者

当時、私は東京・品川の桐ヶ谷に住み、そこ

から大学に通っていました。兄弟が順ぐりに東京の大学に進みましたので、父親がそこに小さな寺を建てたのです。寺といっても本堂が八畳、その隣に六畳間があるだけです。ほんとに小さな寺で、参拝者も少なかったのです。

あれはたしか九月のお彼岸に入った次の日でした。夕方になりまして、もう誰も来ないだろうと思って夕食の準備をしていたのです。そのときガラツと戸が開き、本堂へ人が入ってきました。誰かなと思いつながら、台所から出て本堂をのぞくと、男の人が坐ってご本尊さまを一心に拝んでいたのです。気になったので「どうしたのですか」と声をかけますと、いきなり「私は殺される」と叫んだのです。

これはただごとではないと思って、訳を尋ねました。すると、おもむろに事情を語ってくれました。「実はきのう、仲間とともにある家へ借金を取り立てに行った、いや、行かされた。と

ところが、その家には金目のものはなく、めぼしいものといえばテレビとタンスと子どもの机ぐらのものなんだ。仕方なく、それらの物を運び出すことにした。かわいそうにと思ったが、強引にトラックに積み込んだ。そのとき母親と子どもたちが口を揃えて『あんたら鬼^{おに}だ、狼^{おおかみ}だ』と叫んだんだ。そんなにまで言われて生きていくのはまっぴらだ。そう決心して逃げてきた。つかまれば殺される。そこで和尚^{おしょう}さんに相談に来た」と言うのです。

私は大学院を出て半年足らずのころでしたから、どうしてよいのか見当もつきません。それで「殺されては大変だ。どうしよう」と真剣に考えたのです。そして言いました。「あなたを救うには警察の力を借りるしかありません。いますぐ警察に行くか、暗くなってからにするか、とにかく警察に行きましょう。」

ところが、その人は「警察には始終、迷惑を

かけようして、これ以上お世話になったのでは申し訳ないから、逃がしてくれ」と深刻な顔で合掌して頼むのです。そこで私も男気を出して「わかりました。まかせなさい。しかし、つかまって殺されたらどうします」と尋ねると、「それでもいい」と答えるのです。「殺されてもいいと言うのなら、あなたは本当に私に命をくれますか」と続けて言うと、「あげます」と言ってナイフを取り出し、「ここで死なせてくれ」と叫ぶのです。

しばらく二人で思案したあと「どこか行く当てがあるのですか」と聞くと、「北海道へ行きたい」と言うのです。そのころは東北新幹線もない時代で、北海道へ行くには夜行列車に乗って二日はかかります。その人はお金を持っていませんでした。そこで、お彼岸のお経料が三万五千円あったので、そこから私の生活費を差し引き、三万三千円を手渡しました。

着ているものもヨレヨレだったので、私のワイシャツとズボン、そしてコートもあげました。ちよつとダブダブだけど、袖を折れば何とか着られます。背広は無理かもしれないけれど、ないよりはましだと思つてふろしきに包んでやりました。仏さまからもお供物をおろして持たせました。

そのとき私は何かジーンとこみ上げてくるものがあった、「何か思い残すことはありませんか」と尋ねたのですが、「ありません」と答えます。さらに「ご両親は健在ですか」と聞きますと、「いる、名古屋に」と言います。そこで私は「あなたがこの世で最後に会う人は私かもしれません。あなたが殺されたら、私はあなたのご両親にお会いして事情を話してあげますから、ご両親の住所を書いておいてください」と半紙と筆を出したのです。すると正座して筆を握ったまま、しばし黙考したのです。人間、せ

つばつまつたときの心境はこういうものかと、私はその姿を静かに見ていたのです。

「名古屋市中区……中村……」と書かれた半紙を受け取り、「これは私が預かりますが、もう一つお願いがあります。あなたが今日まで生きてこられたのも、ご先祖さまのお陰なのです。そのご先祖さまにお礼だけは述べていってください」と言つて、「中村家先祖代々之精霊」と塔婆たぼに書いてお経をあげてさしあげました。その人も一心に手を合わせていました。そして陽の沈むのを見て寺を出ていったのです。その姿もまた印象的でした。ボロボロの靴をはいて、荷物を抱えてターツと出ていったのです。

そしてそれつきり何の音沙汰もなく、私は非常に心配していたのです。殺されたかもしれないという思いが胸をよぎりました。すると私は大変な罪を犯したことになります。逃がすのではなかったと後悔しました。そしてこのとき、

いつの日かきつと全国を行脚して、菩提を弔ってやらなければならないという決意を固めたのです。

実は「宗祖をとおして釈尊に還れ」というのが私の誓願に似た気持ちでしたので、藤井日達上人のお力で全国各地に祀られている仏舍利塔を巡拝しようと常々思っていました。それがこの人との出会いによって、実現する運びになったのです。

托鉢行脚

その決意を胸にしつつ、私は永平寺に向かいました。

さて、禅僧が修行する道場を僧堂といいますが、その僧堂に入れてもらうには、まず「旦過寮」に入らなくてはなりません。旦過寮というのは、いわば僧堂に入るための準備教育をするところで、朝の三時から夜の九時まで、十八時

昭和38年 歳末助け合いで市民に募金を呼びかける



間も坐らされます。一般には一週間か十日ぐら
いの期間ですむのですが、私は「こいつは生意
気だぞ」とマークされたのでしよう、二週間も
入れられました。

朝は三時半に「振鈴」といって、起床の合図
の鈴が堂内に鳴り響きます。洗面もそこそこ
直ちに暁天坐禅、引き続いて朝のお勤めがあり
ます。そして夕食が終わりですと、夜の八時か
ら九時まで坐禅堂で坐禅、その他の時間は且過
寮で坐禅という日課です。

こうして僧堂生活の準備教育を受けるので
す、何をすることも先輩は教えてはくれません。
すべて自分で覚えなくてはならないのです。そ
して少しでも間違いがあると、怒鳴りつけられ
ます。すべて自分で覚えなくてはならないので
す。食事の作法から大小便の仕方まで、こと細
かく規律が設けられているのです。

このままではだめだ、早く娑婆に出て勉強し

ないと時代に乗り遅れてしまう——こう思っ
ているうちに体調を崩し、「延寿堂」と呼ばれる病
室に入れられたのです。修行ができなくては仕
方がない、東京へ帰ろうと思い、永平寺を出ま
した。

でもお金がありません。仕方がないので、福
井の町の中を「羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯
諦」と般若心経を唱えながら、托鉢をして歩き
回りました。そして夕方になって福井駅に戻っ
てきました。ちょうどそのとき、プラットホー
ムで汽車の発車を知らせるベルが鳴ってしまし
た。そうだ、あの汽車に乗って東京へ帰ろう、
布施をしていただいたお金で、とりあえず行け
るところまで行こうと考えたのです。

駅構内にはそのとき、上りと下りの二本の列
車が入っていました。福井は僧侶をとんでも大事
にしてくれる町ですから、改札にいた駅員さん
も、袈裟に草鞋姿の私が切符を持っていないと

わかっていながらも「すぐ乗りなさい」と通してくれましたので、慌てて列車に飛び乗ったのです。座席に坐ってやれやれです。そしてきょう一日托鉢して、みなさんからいただいたご喜捨を応量器りょうきから出して数えはじめたのです。すると何と六百八十円も入っていました。昭和三十八年の話ですが、何とか名古屋までは行けます。名古屋で降りて、また托鉢をさせていただけようと思っていたのです。

そのとき車内放送がありました。「この列車は富山経由の直江津行きです。」何と名古屋、東京方面とは逆の、新潟の直江津へ向かう列車に乗っていたのです。これは大変なことになったと思つて、車掌さんに聞いたのです。すると直江津に着くのは十時ぐらいとのこと。そのころは寒い時期で身体に悪いと思つて、富山で途中下車することにしました。富山にはそのころ、自分の寺ではなく、よその寺に用僧といつてお手

伝いをしている大学時代の後輩がいたので、その彼を訪ねてみようと思つたのです。

八時半ごろ富山に着き、歩いていきました。寺では九時になると「開枕かいたん」といつてみな休んでしまいます。「ごめんください、ごめんください」といくら叫んでも、なかなか出てきてくれません。しかし他に行くところがないのですから、帰るわけにもいきません。しばらくして「おーっ」という声が出て、若い雲水が戸を開けてくれました。それが私の後輩の松本君だったので、

ようやく草鞋を脱ぐことができました。そして松本君に事情を説明すると、「あす托鉢をされたらどうですか」と言ってくれたのです。そこで次の日、朝の九時から午後の三時まで托鉢をしたのです。

富山は仏国ですから、一円、五円、十円と、どこの家でもご喜捨をしてくれます。応量器は

ご喜捨でいっぱいになりました。応量器は食器ですが、托鉢のときはこれを捧げ持つて、ご喜捨を入れてもらうのです。帰つて数えてみましたら、八百円ぐらいあります。翌日も托鉢しました。やはりたくさんのご喜捨をいただきました。そこで千円札に両替してもらつて、仏さまにおあげしました。いただいたものは必ず、まづ仏さまにおあげして、それを仏さまからいただくのです。

さらに松本君に「せっかくここまで来たのですから、総持寺の祖院がある能登まで行かれたらどうですか」と勧められました。大本山総持寺はもともと能登にありましたが、九十五年前に焼失してしまつたのです。そのとき永平寺が福井の山奥にあつて、総持寺が能登の突端にある、これでは地理的に片寄りすぎている、梶を転じて福としなくてはならないということ、八十年前に横浜の鶴見に移転したのです。

それで現在、能登にある総持寺のほうを祖院といひます。その祖院にお参りしようと思つて行きました。もちろん托鉢しながらです。

こうしたいきさつで、殺されたかもしれない男の人の菩提を弔うための托鉢行脚が始まつたのです。「念ずれば花開く」といひますが、念ずる心が深ければ、道はおのずから開けてくるものなのです。不思議なものです。

自己との闘い

私は能登半島を一周したあと北陸、山陰地方を巡つて九州の熊本まで行き、山陽地方を通じて京都に至りました。毎日、たくさんのご喜捨を受けました。でも、いいときはばかりが続きものではありません。三日も四日も雨が続きますと、誰にもご喜捨をしていただけません。そうしますと、お金がなくなつてしまふのです。

京都はご存じのように、寺がたくさんありま

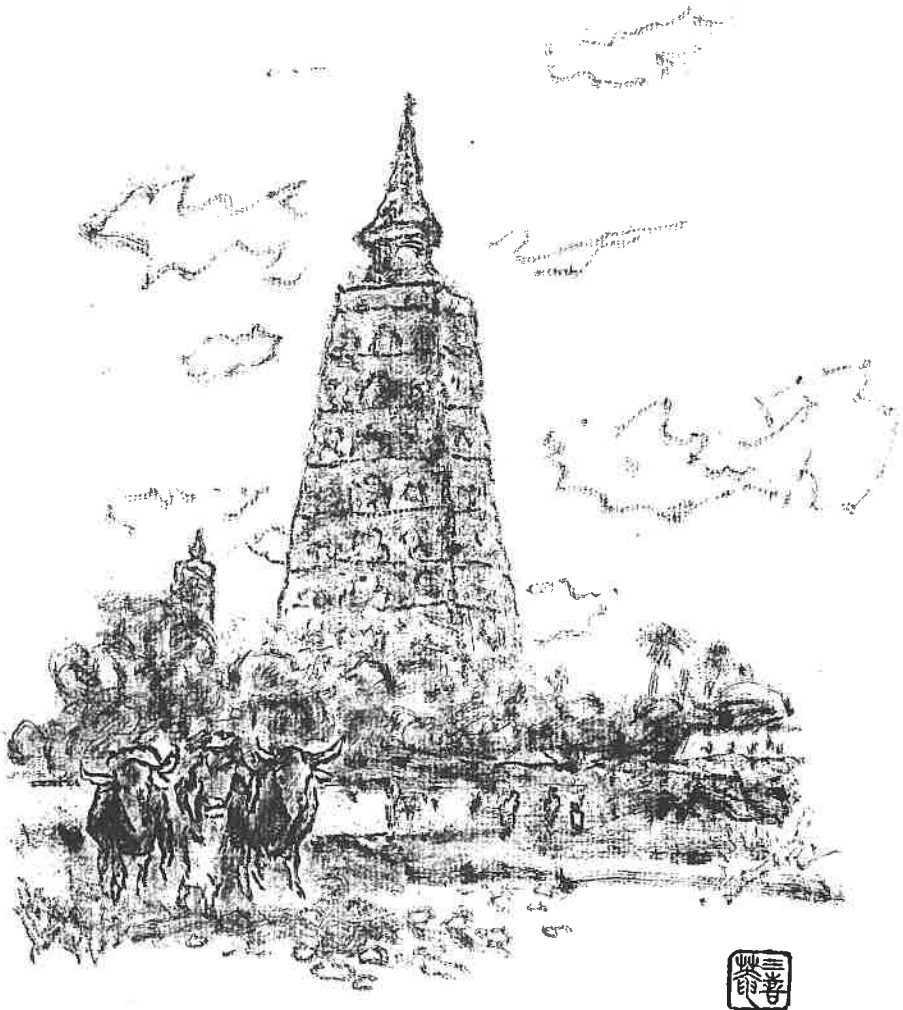
す。どこか泊めてくれる寺はないかと、あちこち探しました。ところが私は雨の日も風の日も托鉢を続けてきましたから袈裟はボロボロで、草鞋を履いているから足も汚れ放題で馬糞のような臭いがあります。どこを訪ねてもいい返事はもらえません。仕方がないので、京都から少し離れた亀岡まで足を延ばしました。夜も八時半になっていました。三日も雨にあたっていますから、身体が冷え、疲れもたまっていたのです。網代笠をかぶり、杖をついてヨロヨロしていました。

もう歩くのも限界になったころ、やっと宿が見つかりました。「ごめんください、今晚泊めてください」と頼みますと、私があまりにも見すばらしい姿をしていたからかわいそうだと思っただけでしょう、「いいよ」という返事をもらったのです。素泊まりの料金が二百五十円。そのとき私が持っていたお金は三百五十円です。宿代

を払いましたら、百円しか残りません。

「まず風呂に入らせてください」と宿のご主人にお願ひしました。「風呂？　いつ空くかわからないなあ」と言うのです。ということは風呂に入らせないということなのです。仕方がないから銭湯に行きました。当時、銭湯の料金は十六円。身体をきれいにして温まりましたら、今度はお腹が空いてきたのです。朝から何も食べていませんでしたので、お酒の一合瓶と十円のコッペパン一つと同じく十円のパターを買いました。残ったお金は二十五円。それを握って宿へ帰り、机の上に並べてみました。「いまの私の生命はたったの二十五円。何でこんなことをやっているのだろう。馬鹿だなあ」と自分で自分が情けなくなりました。

翌朝四時に起きると、また雨です。五時になってもやみそうにありません。六時になったら、さらに強く降ってきます。私はもう絶望感に陥



りました。二十五円では生きていけません。そこでしばし部屋の中で考えました。しかし、ない頭でもしぼってみるものですね。いい知恵が必ず出ます。私がそうですから。気がつきました。「そうか、なあんた」と思ったのです。私は僧侶です。僧侶の役目はお経をあげること、何もできなくても、まずお経をあげることだと気がついたのです。簡単なことなのです。

そこで宿のご主人に「すみません、お経をあげさせてください」と頼み、お仏壇の前へ行きました。そして一生懸命にお経をあげさせていだいたのです。するとご主人が「雲水さん、お腹が空いているだろう」と言って、ご飯を食べさせてくれたのです。美味しかったですねえ。しかし、その満足感も束の間、私は宿のご主人にお礼を申し上げて、雨の中に飛び出してきました。網代笠に降りかかる雨が、しずくとなって応量器に溜まります。「ああ、こんなにご

喜捨がたまるといいのだが……」と思いながら、溜った水をこぼします。「羯諦羯諦 波羅羯諦 波羅僧羯諦」と唱えては、水をこぼすのです。何を何回となく繰り返しました。

「羯諦羯諦」とは何かという、みんなて手を取り合って、悩み苦しみのない素晴らしい世界へ行こう、という意味なのです。ですが、私のことは誰も相手にしてくれません。立派な家の玄関に立っても、戸をピシヤリと閉められてしまいます。でも毎日毎日続けていると、腹も立たなくなってきたのです。

その日も朝から降り続いていた雨が、午後三時ごろにはあがりはじめました。さて、きょうの泊まるところをどうしようかと思案しながら歩いていると、女子校の前にさしかかっています。私がいま汚い格好をしているので、女学生たちは立ち止まって私を見つめています。ところが、ある一人の女学生が私の側へや

つてきて、応量器の中へ十円を入れてくれたのです。私は嬉しくなって、その場に土下座して感謝を申し上げたのです。

そうすると、周りにいた女学生たちが次から次へとご喜捨をしてくれました。応量器はたちまち、ご喜捨でいっぱいになりました。その瞬間、太陽の光がパット私の目に射し込みました。「そうだ、人間は簡単に死なないんだ」。私は思わず、天に向かって報告していました。何も不安に動ずることはない、仏さまに任せきつていけばいいのだ、と気がついたのです。それからというものは、怖いことも嬉しいこともすべて超越して、これでいいという心境になることができました。

こうしたいろいろな出来事を経験しながら、各地を行脚していたのですが、そんな中でも脳裏から離れなかったのは、あの「北海道へ行く」と言った人のことです。逃がさないで無理やり

に警察署に連れていけばよかった、悪いことをした悪いことをしたと後悔の念ばかりが起きて、お経をあげながら無事を祈っていたのです。

あるとき名古屋に足を踏み入れ、ご両親にお会いしようと思つて、紙に書いてもらつていた住所に向かいました。しかし、いくら探してもわからないので、交番に行つて尋ねたのです。ところが、その紙に書いてある住所はどこにもないのです。何とその人は詐欺師だったのです。自分はその人に対して悪いことをしたと思い、毎日一生懸命に供養をし続けていましたのに、何と騙だまされていたのです。

しかし、その詐欺師のお陰で、私は各地の仏舍利塔の巡拝ができたのです。騙されたお陰で、本当に尊い修行をさせてもらいました。私はこのとき呵か々かた大笑たしょうして、人生はこんなものだ、これが娑婆なのだ、と思いました。しかし、さすがに事実を知った瞬間には肩の力が抜けまし

た。いや全身の力が抜けたというのが偽らざる心境だったと思います。そしてここで、私の托鉢行脚は終わったのです。

年の暮れでした。そのとき三千円のお金があったので、それを朝日新聞社に持って行って、困っている人たちのために使ってほしいと手渡しました。手元に二十円残りました。十円のパンを一つ買い、最後に残った十円で電話をかけました。名古屋には三番目の兄のお嫁さんの実家があったので、東京へ戻るためのお金を借りようと思ったのです。しかしあまりに慌ていたので、電話番号を間違えてしまいました。仕方なく尋ね歩き、ようやく探しあてました。その家人から話を聞くと、アメリカから十年ぶりに帰国した兄が私を探しているというのです。

とにかくお金を借り、夜行で実家へ駆けつけました。そして兄たちがいる前で、こう言った

のです。「私は日本を一周してきました。ありとあらゆることをやってもきました」と威勢のいいことを告げたのです。すると大半の者は「いやあ、大したものだ」と褒めてくれたのですが、長兄だけは「お前、そんな大したことをしたのなら、ここに出してみろ」と言ったのです。ハッと思いました。出そうとしても何もないのです。そこで人生の修行の未熟さを悟ったのです。そして、これから明日に向かって真面目に一生懸命に生きようと、覚悟も決めたのです。それから修行のやり直しです。また総持寺へ行き、三年間の修行に入りました。

その総持寺で、私は実に素晴らしい出会いに恵まれました。大阪に「ナリス」という化粧品会社がありますが、創業者である村岡満義さんがあるとき、幹部社員を連れて総持寺に参禅されたのです。そのときの参禅指導係が私でした。若くて覇氣はきに溢あふれていたころですから、坐禅中、

姿勢の悪い人に遠慮会釈なく警策を当てました。

警策とは、坐禅中の僧の眠気や気の緩みを戒めるためなどに用いる棒で、長さは一・三メートルほどで、先のほうが板状になっています。

これには相手側も相当反発したようで、研修会が終わったあと私に向かって「会社に来て、参禅指導をしてほしい」と要請したのです。「よろしゅうございます」と返事して、約束の日時に参上したのですが、実はこれは私に対する仕返しへの参禅会だったのです。幹部社員が事前に申し合わせをして、全員が最初から最後まで警策を受けるために合掌しつづけていこう、そうすれば叩かなければいけないから、叩きつづける相手はきつと参ってしまうだろう、という作戦だったそうです。

何しろ全員が次から次へと合掌するものからです、私は休む暇もなく警策を当て、手には豆

昭和40年 インドの子どもたちと



ができて血は吹き出すといったありさまでした。それを見て村岡社長さんが幹部社員に注意をしたそうですが、この仕返しに坐禅会が逆に、私とナリスおよびその社員の方々を堅く結びつけてくれる機縁となったのです。

私は総持寺の修行を終えてインド仏跡参拝を思い立ったのですが、費用がありませんのでナリスに出かけ、村岡社長さんに「お金を貸してください」と頼み込みました。そのとき村岡社長さんは快く引き受けてくださったのです。私は天にも昇る喜びで、さっそく支度を整えてインドに出かけたのです。

無常の人生

いままでの話は私の体験談でありました。次には、いろいろな宗教、特に仏教に關係のある話を中心に進めたいと思います。

お釈迦さまは小国ながらも一国の王子として

生まれ、幼少のころから何一つ不自由のない生活を送っていました。内省的で感受性が強く、動物や植物にまで優しい思いやりを示すのでした。こうしたお釈迦さまの姿を見るにつけ、父王は、もしかしたら出家するのではないだろうかと不安の念を抱いたのです。そして何とかお釈迦さまの心を紛らわせようとして、夏、冬、雨期それぞれの季節に応じた住み心地よい三つの宮殿を造って住ませたり、多くの美女を側近くにはべらせ、歌や踊りで、お釈迦さまの心をなるべく外に向けようとはしました。

ある日お釈迦さまは、城を出て郊外の園林で遊びたいと申し出られました。お釈迦さまに物を深く考えさせまいと常々心を砕いていた父王は、快くお釈迦さまの希望を聞き入れて多感なわが子を考え込ませるようなことが起こらないように各方面に気を配りました。

ところが皮肉なことに、お釈迦さまが馬車に

乗って東の門から出ますと、間もなく白髪の老人に出会いました。身体はすっかり瘦せ衰え、杖にすがって喘ぎ行くその姿を見て、お釈迦さまは「あれはどういう人か」と馭者ぎよしゃに尋ねました。「老人です。生あるものはみな、この苦しみを免れることはできません」と言う馭者の言葉に、若いお釈迦さまは心を暗くし、園林で遊ぶ思いも消え失せ、早々に城に帰って物思いに沈むのでした。

それで次に出かけるときに、南の門から城を出ました。このときは苦しみもだえる病人の姿を見、馭者の「どんな人でも、この苦しみから逃れることはできません」と言う言葉を聞いて、お釈迦さまはまたまた憂いに沈むのでした。

そして三度目、今度は西の門から出たお釈迦さまは、ここで死者の葬列に出会い、肉親の嘆き悲しむ姿に接し、生あるものは必ず死ななければならぬことを知り、居ても立ってもいら

れない苛立ちいぢにかられ、直ちに城に帰って思い悩むのでした。

このように老、病、死の苦しみを初めてまともにごらんになったお釈迦さまは、残された北の門でいったい何を見たのでしよう。お釈迦さまはここで、やすらぎと静寂に満ちた、見るからに気高い姿の出家修行者に出会いました。そして深く心を打たれ、「世の中にこれに勝る者はない。私も出家して道を学ばなければならぬ」と、心密かに出家に思いを馳はせたのです。

人間の苦しみの代表的なものは、生・老・病・死の四苦です。なぜ苦しまなければならぬのでしょうか。その根源は無常です。無常というのは、この世のすべてのものは生まれ、壊れ、滅して何一つ常住不変のものはないということ。人生はまことに無常迅速で、紅顔の美少年はあつという間に白髪の老人となり、健康な身体は病魔に冒されて不随となります。命は草

葉に宿る露のごとくもろいのです。従って人生をまともに深く見つめる人は、人生のはかなさ、たよりなさに苦しむのです。

その苦悩を知り、それからの解脱（開放）を求めた人類最初の人、それがお釈迦さまです。

お釈迦さまが四カ所の門から出て、人生の苦悩に直接触れられた「四門出遊」の意義は大きいのでして、これがやがてお釈迦さまの出家の遠因となるのです。

お釈迦さまは、二十九歳のとき、最愛の妃と子どもを残して出家され、六年のご修行を経て三十五歳で悟りを開き、八十歳でお亡くなりになるまで、インド各地を巡錫して説法教化に終始されたのです。

私は、お釈迦さまの国インドに出かけ、仏跡巡拝をして、お釈迦さまのご生涯を思いながら、つくづく考えさせられました。「諸行無常」、つまり形あるものは時々刻々変わっていきます。

誰にでも青春はあります。私にもありました。しかし、青春は二度と戻ってきません。ですから素晴らしいのです。それゆえ素晴らしい本当に悔いのない人生を送らなくてはなりません。

徳川家康の十番目の子どもといわれる頼宣は、十四歳のとき大阪夏の陣に巡りあいました。もちろん初陣です。頼宣は先手の大将にしてほしいとせがんだのですが、家康は許しませんでした。やがて合戦の火ぶたが切っておとされ、頼宣は先手の大勝にしてみらえなかつたので、地団駄踏んで悔しがりました。その様子を見た老臣が「殿、殿はまだ十四歳でございます。これから先、合戦は幾たびもございます」と言つて慰めました。すると頼宣はその老臣をはつたとにらみつけ、「頼宣に十四歳のときが二度あるか」と叱責したのです。

家康はこれを聞いて、「いまの一言、槍一番にて候」と褒めたということですが、頼宣の「十

四歳のときが二度あるか」という一語は、ただいまの一瞬に武人としての生命を見出したものと言えます。

時は今 処ところあしもとそのことに打ち込む命
永遠のみ命

という東京・芝の増上寺の椎尾弁匡上人の歌があります。今日ただいまの一瞬に、一生懸命に打ち込んでいけば、無常の世の中にありながら、それは永遠に尽きることのない仏さまの大生命に通うものなのです。

また「人間万事塞翁が馬」という中国の諺ことわざがあります。国境近くに住んでいる老人、塞翁の飼育していた馬が逃げていってしまいました。人びとが慰めると、塞翁は「これがまた、どんな幸いにならぬでもない」と言って平気でいました。すると二、三カ月して、その馬が駿馬しゅんまを引き連れて帰ってきたのです。人びとがそれを喜ぶと、塞翁は「とんだ災いとならぬものでも

ない」と言いました。しばらくすると、塞翁の息子が馬から落ちて足を折ってしまいました。

人びとがまた慰めると、塞翁は「これが幸いにならんともかぎらぬ」と言いました。それから一年ほどして、この地方に戦争が起りました。

若者はみんな召集され、ほとんどの者が戦死したのですが、塞翁の息子は足の怪我けがから徴兵を免れることができたため無事でした。

つまり人生の吉きつ凶禍きうか福は定めがなくて、災いが福に変わり、福が災いとなることもあるということです。これもまた無常の一樣相いっやうさうです。ですから幸福の絶頂にあっても有頂うちやうてん天にならず、不幸のどん底にあっても非観ひかんせず、「時は今 処あしもとそのことに打ち込む命 永遠のみ命」で生き抜くことが大事なのです。

私はこの故事を、人生そのときを仏さまのお命を生きさせていただく心で一生懸命に生きていけばいいのだ、ととらえているのです。する

と不思議に心は絶対に通じるのです。

心のエネルギー

インドで仏跡を巡拝して人間の真実の生き方に眼を開いた私は、帰途タイに立ち寄り、ここで上座部仏教の僧侶として一年間の修行生活に入りました。上座部仏教は日本の大乘だいじよう仏教と違って、いわば戒律仏教で、僧侶は二百二十七もある戒律を固く守って生活しています。

例えば正午を過ぎると翌朝まで食事をしてはならないとか、女の人の衣服にお袈裟の端が触れるだけでもいけないとか、女の人から物を手渡して貰ってはいけないとか、いろいろ厳しい戒律かいりつがあり、それを固く守って生活するのですが、人間やる気になりさえすれば苦行も苦行でなくなりません。

こうしてタイでの修行を終えた私は、今度はアメリカの人にも仏教を説けるだろうと自信を

得てアメリカの兄に連絡を取り、兄の主宰する禅センターでアメリカ人とともに参禅生活を二年間行ないました。そしてアメリカから帰り、横浜市港南区日野町に善光寺を開創し、ナリスの村岡社長さんを開基さまにお迎えいたしました。思えば私のこれまでの歩みは、村岡社長さんに対する報恩行でありました。

つくづく思いますが、人間、恩を忘れては禽きん獣じゆうにも劣ります。恩を感じ、恩に報いる心で生活を築いていけば、必ず道は開けてくるのです。

昔、インドにナンダという、とても貧しい生活をしていたおばあさんがいました。八十歳になつて生おい先も長くはありません。そこでせめて一度、祇園ぎおん精舎しょうじやというところに行つて、自分を生み育ててくれたいまは亡き両親のために明かりを灯し、お釈迦さまのお話を聞いて、感謝の意を表わしたいと思つたのです。

ようやくわずかなお金を得て、油屋に行きま

した。しかしそのお金で買えるのは、わずかな量です。油屋の主人は「たったこれだけの油をどうするのですか」と尋ねました。ナンダはその願いを伝えると、油屋の主人は油の量を増して施してくれました。

ナンダは歓喜して一燈を点じ、仏前の多くの燈の中に献じました。夜が明けて、他の燈明はみな消えましたが、ナンダの小燈だけは赤々と燃え続けたというのです。

この物語は「長者の万燈より貧者の一燈」といわれ、真心のこもった寄進はたとえわずかでも尊いし、物の多少よりも真心が大切だということを教えています。

いま一つ中国の話をしみますと、黄檗宗を開いた希運きうんというお坊さんがいます。この希運きうん禅師のお母さんは、たった一人の息子に、一生懸命に修行して世の中に役立つ人間になりなさい、と僧侶になることを勧めました。ところが僧侶

は毎日厳しい修行をしなくてはなりません。息子に勧めはしたものの、お母さんは心配の毎日です。とうとう心労のあまり目が見えなくなつてしまいました。

それでもなお息子のことが心配になって、二十年の月日が経ったある日、家の前に看板を出したのです。看板には「修行中のお坊さんはわが家に泊まってほしい」と書いてあります。僧侶は草鞋を履いていて足が汚れていますから、泊まる場合には足を洗わなければなりません。希運きうん禅師のお母さんは僧侶たちの足を洗わせてもらっていたのです。なぜそんなことをしたのかと申しますと、希運きうん禅師の右足にはこぶがあつて、目が見えなくても足に触れば自分の息子とわかるからなのです。

たまたま希運きうん禅師がわが家の前を通りかかりました。どうしようかと思案しましたが、ひと目母の姿を見たいと思い、「ごめんください」と



声をかけたのです。しかしお母さんはもう二十年ものあいだ息子の声を聞いていませんから、わが子と気がつきません。希運禪師は足を洗ってもらいました。ところが右足のこぶを気付かれてはと思い、左足を二度洗ってもらったのです。

そしてわが家に泊まらずに密かに合掌して立ち去り、そそくさと渡し舟に乗ってしまいました。修行中の希運禪師にしてみれば、愛着の情にほだされて修行の妨げとなることを恐れたからでしょう。一方、近所の人から「あの人希運さまだよ」と教えられた目の不自由な母親は、「希運、希運」と叫びながら息子の後を追いました。そして誤って川に落ちてしまったのです。

雨が降っていて川は増水していたので、すぐに流されてしまいました。希運禪師はお母さんを探しましたが、見つかりません。松明たいまつを掲げて、夜中も一生懸命に搜索しました。しかし見

つけ出すことはできませんでした。

希運禪師は悲嘆のあまり大声で「一子出家すれば九族天に生ずと、若し然らざれば諸仏は妄語をなす」と唱えました。つまり一人が出家すれば、両親だけでなく親類縁者ごとごとくが救われるといわれているが、もしそうでなかったら仏さまは嘘を言っていることになると言い、そして「わが母多年、自心に迷う、如今花はひらく菩提林、当来、三会、もし相値わば、帰命大悲觀世音」と唱えて松明を川の流れに向かつて放り投げると、その消えゆく煙の中に母親が昇天する姿を見た、と伝えられています。

「お坊さんというのは、ずいぶんむごいことをするものだ。それではお母さんがあまりにもかわいそうだ」と思われる方があるかもしれませんが、本当に一生懸命に生きようとすれば、お坊さんならずとも、やはりこのようにならざるをえないのです。

うら若い女性の話をしてしましよう。ある学

校で、一学期の終業式の日、その年に新採用になったばかりの若い女性の先生の辞任式が行なわれました。「私はマラソンで日本代表になりましたので、教員を辞めます」と、驚く生徒たちにこの言葉を残して、着任後わずか三カ月で教壇を去ったこの先生は、中学二年のとき父親を亡くし、母親の細腕一つで育ったのでした。ようやく一人前になってホッとしていたその母親は、娘のこの突然の退職を許すはずはありません。娘もまた母親の気持ちを考えないではなかったのですが、マラソンへの夢を捨てることはできませんでした。ろくにあいさつも交わさず、まるで夜逃げでもするかのように、娘は許さない母親の許を去っていきました。

これは平成三年の夏、東京で開かれた世界陸上競技大会の女子マラソンで予想をはるかに超えて、見事銀メダルの栄冠に輝いた山下佐知子

選手の実話です。

京セラに入社して陸上競技部に所属した彼女のマラソン修行が始まったのですが、郷里の母親とは電話もせず便りも出さず、一言も口をきかない断絶状態が長いあいだ続いたといえます。その二年後の春、名古屋国際マラソンに初めて出場して四位に入賞し、平成二年の北海道マラソンでは二位、その翌年春の名古屋国際マラソンでは一位と、マラソン出場五回目で初優勝を飾り、世界陸上の女子マラソンの出場権を獲得したのですが、母への恩愛を断ち切った五年間のマラソン修行が、並大抵なみなたてのものでなかったことは想像に難くかたありません。しかし報われるときが来ました。彼女の心が母親に伝わったのです。

東京の会場に応援に駆けつけたお母さんは、スタートとゴールは会場で、折り返し点には品川まで電車で行き、帰りは電車の中で両手を合

わけて食い入るようにラジオにしがみついていたという事です。一時はわがままな娘の行動に腹を立てたお母さんだけに、その喜びはその分だけ倍加されたことでありましょう。

希運禪師は生前の母親を喜ばすことはできませんでしたが、その死を即成仏に導き、九族をして天に生ぜしめる報恩行を成し遂げたのです。「志あるところに道あり」といい、道はおのずから開けてくるのです。

アメリカにカーネギーという人がいました。大変な成功者で、カーネギーホールという文化の殿堂を造られた方です。

彼は最初ボーイラーマンの職に就いていました。その後、郵便配達員に転職しました。自分の受け持ち区域のことについては、何を尋ねられてもすべてわかっていたそうです。その真面目な勤務態度を見続けていたある人に「あなたのように努力をする人が、これから発展してい

く電気の技術を習得したならば、必ず世界一の成功者になる」と勧められて、彼は学校に入り技術を学びました。そして製鉄業を興し、世界一の富を成したのです。「石の上にも三年」といいます。三年という月日は実践力の強さ、継続の度合いを測る最小の目安で、三年続かないようではお話にならず、実践は三年以上の継続によって初めて実を結ぶのです。生命力を一つのこと集中し、これを積み上げていくところに、成長が約束されるのです。

カーネギーは人のために、人類のためになるような努力をコツコツと重ねていったのです。そういう素晴らしいエネルギーを、私たちはみなもっているのです。そのエネルギーを有効適切に活かしたいものです。そこに人間としての希望の未来があるのです。

日常の五心

私が住職を務める善光寺はゼロからの出発でしたが、お陰さまで順調に発展してまいりました。それで開創十五周年を期し、報恩行の一端として海外に留学僧を派遣して人材の育成を図り、仏教の振興、世界の平和、人類の進運にいささかなりとも貢献しようと思い、「善光寺海外留学僧派遣育英会」を設立いたしました。

最近の日本は、暮らしは快適になっていく一方ですが、いつしか感謝の心を忘れ、自分さえよければという自分本位の発想が強くなり、共に生きる、共に栄えるという大事な生き方を忘れて、自己の利益だけを追求するようになってきました。心と心の触れ合いも薄れて、対人関係はギスギスしているようです。

そこで「これではいけない。仏さまのお心とお徳を伝えなければ、日本だけでなく世界も破

滅の道を辿っていくにちがいない。仏教による人づくりを進めることこそ、私の使命ではないか。お釈迦さまのみ教えを世界に弘めよう、情熱をもって布教する宗教者を育てよう」という大誓願を立てたのです。

正直なことを申し上げて、私には財産など何一つありません。そのとき立正佼成会の「一食いちじきを捧げる運動」の展開にヒントを得たのです。ご存じでない方もおられるかと思うので申し上げますと、立正佼成会では、信者の方々が月三回食事を抜き、そのお金をアジアやアフリカの恵まれない人びとに献金しようと「一食を捧げる運動」を展開しているのですが、私はこの運動を真似て、檀家のみなさんにこう呼びかけました。

「どうか、私のこの誓願を叶えさせていただけないでしようか。毎日の食事のひと口分を辛抱して、そのお金を私にいただきたい。そうすれ

ば大勢の人が助かるのです。どうか私を助けてほしい。お力をいただきたい」と。もう理屈や理論を超えて、ただただお願いするだけでした。

一口為断 一切悪 二口為修 一切善 三
口為度 諸衆生 皆共成 仏道

これは私たちが食事を頂戴するとき、「五観の偈」の次に唱えるものです。「ひと口お食事をいただいたなら、あらゆる悪いことはしない。ふた口食べたら、よいことはどんなに小さいことでもする。三口食べたら、生きとし生けるものごとごとく濟度し、みなともに正しい仏の道を成就する」ことを誓うのです。そういう誓願をもって、食事をいただくのです。曹洞宗では、毎日の食事も大切な仏道修行ととらえていますので、ひと口分のお金を献上することは、まことに尊いことなのです。

毎食わずかひと口分という十円程度のお金です。一年で一万円ほどですから、これは容易に実行できることですので、賛同者の輪は広がっていきましました。

この私のささやかな歩みは、昭和六十二年、フランスのパリ第一大学で開かれた第二回日仏セミナーにおいて発表する機会を与えられ、お陰さまで大きな反響を呼びました。

こうして檀家の方々の協力によって発足し運営されている「海外留学僧派遣育英会」は今年で八年目を迎え、昭和六十年から毎年留学僧を派遣しています。現在、インド、スリランカ、タイ、韓国、アメリカ、イギリス、フランスに留学中で、さらに中国および韓国からの人たちが日本へ受け入れてあります。日本人だけでなく外国人を含め、九カ国に三十四人を派遣しています。

派遣はまだ七回ですから、その力はまだ微々

たるものですが、「継続は力なり」で、十年二十年の後には素晴らしいパワーを発揮することでありましょう。いや、今日すでにその兆候が出てきました。

フランスから来日して禅修行に励んだバシユ・ルース・浄信じやうしんという尼僧さんが修行を終えてフランスに帰り、一昨年からフランスに禅道場を開設する準備を進めていましたが、このほど開設の目安がつかしました。まことにうれしいことでもあります。

仏教は転迷開悟てんめいかいご、迷いを転じて悟りを開く教えであります。そして迷いとは、自分中心のものの方、生活態度から生まれてくるものです。ですから、己を空しゅうして生きることが悟りに至る道です。

道元どうげん禪師ぜんじが次のような言葉を残されています。

「仏道をならうというは、自己じこをならうなり。

自己をならうというは、自己をわするるなり。自己をわする、というは、万法に証せらる、なり。万法に証せらる、というは、自己の身心しんしんおよび他己の身心をして脱落せしむるなり」

これをわかりやすく言うと、仏法を学ぶということは自己を学ぶということであり、自己を学ぶということは無我になることであり、無我になるということは周囲のものと同調することであり、周囲のものと同調することとは自分と他人の分け隔てをなくすことである、ということです。

自分を投げ出して無我になれば、相手と一体になることができます。それは難しいことではありますが、簡単にまとめるならば「日常の五心」といって、することは次のことだけでよいのです。

一、すみませんという反省の心

一、はいという素直な心

一、お陰さまという謙讓の心

一、私ががしますという奉仕の心

一、ありがとうという感謝の心

これはみな自分を投げ出して無我になったところから生まれてくる心であり、実践であります。この中の一つでもいいのですから、実践してみてください。きつと人生は変わってきます。明るくなってきます。

そして仏教について勉強したいという気持ちがありましたら、私の寺を訪ねてきてください。困ったときでも結構です。いつでも寺に訪ねてきてください。お待ちしています。みなさんは今後の世界を担う尊い命なのです。今後の大いなるご健闘を祈っています。

（神奈川県港南警察署で行なわれた若年者特別講習会の講演に加筆）

